

宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報

(I)

1980

宮崎県教育委員会

**宮崎学園都市
埋蔵文化財発掘調査概報**

(I)

1980

宮崎県教育委員会

序

宮崎県教育委員会は地域振興整備公団の委託及び宮崎県土木部の依頼を受けて、宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しております。初年度にあたる昭和55年度は、5号地遺跡及び11号地遺跡についての発掘調査を実施いたしました。本書はその概要報告であります。

5号地遺跡については完掘に至り、縄文早・前期の遺物の出土と共に、平安時代の土城の発見もあり、複合遺跡の所在を明らかにすることが出来ました。また、11号地遺跡については限られた範囲の調査ではありましたが、住居跡、溝状遺構等の発見、及び県内初の弥生時代の軽石製石棒の出土など本県考古学解明のための貴重な調査例を加えることが出来ました。

なお、この調査の成果が学術関係者だけでなく、社会教育や学校教育の分野にも広く活用されると共に、なお一層の文化財保護行政推進のための一助となることを期待いたします。

発掘調査にあたって深い御理解と御協力を示された地域振興整備公団及び宮崎市、清武町並びに関係者各位に深甚の謝意を表します。

昭和56年 3月31日

宮崎県教育委員会

教 育 長 四 本 茂

例 言

1. 本書は、地域振興整備公団宮崎学園都市開発事務所の委託及び宮崎県土木部河川砂防課の依頼を受けて実施した宮崎学園都市建設予定地内に所在する遺跡の発掘（試掘）調査の概要報告書である。本書に掲載したのは、昭和55年度に調査した次の2遺跡である。

- ① 5号地遺跡 昭和55年10月27日～11月25日
- ② 11号地遺跡 昭和55年11月18日～昭和56年1月14日

2. 発掘調査は、岩永哲夫と北郷泰道が担当した。
3. 執筆分担は、本文目次末に記した。
4. 設定したグリッドの方位は磁北である。
5. レベル高は海拔絶対高である。
6. 土層の色調は「新版標準土色帖」農林省農林水産技術会議事務局監修による。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	(北郷)	2
II	調査に至る経緯	(岩永)	2
III	調査の組織	(岩永)	3
IV	調査の概要		4
1.	5号地遺跡	(岩永)	4
1)	調査経過		4
2)	包含層の状態		6
3)	遺構		6
4)	遺物		11
5)	小結		14
2.	11号地遺跡	(北郷)	22
1)	調査経過		22
2)	包含層の状態		25
3)	遺構		26
4)	遺物		29
5)	小結		34
V	結語	(北郷)	42

挿図目次

第1図	遺跡所在地図	1
第2図	5号地遺跡発掘区図	5
第3図	Af~Ad-15南壁土層実測図	6
第4図	遺構及び遺物分布状況実測図	7
第5図	2号集石実測図	9

第6图	1号土坑实测图	10
第7图	2号土坑实测图	11
第8图	縄文土器实测图	12
第9图	土坑出土土器实测图	13
第10图	出土石器实测图	13
第11图	2号土坑出土鉄鎌实测图	14
第12图	11号地遺跡発掘区图	23
第13图	By~Ci-11南壁土層实测图	25
第14图	遺構及び遺物分布状況实测图	27
第15图	縄文土器实测图・拓影	30
第16图	1号住居跡出土軽石製石棒实测图	31
第17图	石器实测图	31
第18图	弥生土器实测图	32
第19图	Br-9出土壺形土器实测图	33

图 版 目 次

图版 1	5号地遺跡(発掘前)	15
图版 2	(1) 発掘風景	16
	(2) 遺物出土状態	16
图版 3	(1) 2号集石	17
	(2) 2号集石下部	17
图版 4	(1) 1号土坑	18
	(2) 2号土坑	18
图版 5	出土遺物 (1) 縄文土器	19

図版6	出土遺物 ② 縄文土器・布痕土器	20
図版7	出土遺物 ③	21
図版8	(1) 11号地近景	35
	(2) 11号地近景	35
図版9	(1) 溝状遺構及び土壇・ピット群 (東側から)	36
	(2) 溝状遺構及び土壇・ピット群 (西側から)	36
図版10	(1) 1号住居跡全景	37
	(2) Br-9弥生土器出土状態	37
図版11	出土遺物 (1) 弥生土器	38
図版12	出土遺物 (2) Br-9出土壺形土器	39
図版13	出土遺物 (3) 弥生土器・縄文土器	40
図版14	出土遺物 (4) 軽石製石棒ほか	41

1. 5号地遺跡
2. 11号地遺跡
3. 木花古墳群
4. 辻遺跡
5. 若宮田遺跡
6. 松ヶ迫窯跡

I、遺跡の位置と環境（第1図）

宮崎学園都市建設予定地は、宮崎市南部と清武町とにまたがる洪積台地上にある。鱒塚山系の北東の末端部に位置し、南には加江田川が流れ、北には水田地帯の沖積平野がひろがりさらに北方には清武川が流れている。

これまで発掘調査された周辺の遺跡としては、建設予定地のおよそ2.5km北方の清武川左岸の洪積台地上に辻遺跡及び若宮田遺跡がある。共に縄文早期の遺跡地であるが、ことに辻遺跡は良好な塞ノ埴式土器の資料を出土している。

他に、須恵器の窯跡として知られる松ヶ迫窯跡が北東約3kmの地点に、北方約1.2kmの地点に木花古墳群が位置している。木花古墳群は、前方後円墳3基、円墳5基で構成される小規模な古墳時代後期の古墳群である。

さて、5号地遺跡は建設予定地の清武町側（宮崎郡清武町大字木原）に位置し、標高15mを中心とする北東にひらけたなだらかな舌状台地上に所在し、前面には水田がひろがっている。水田との比高差はあまりなく、背後には山がすぐせまり、居住に適した場所は限られている。

11号地遺跡は建設予定地の宮崎市側（宮崎市大字熊野）に位置し、南北両側が谷間で挟まれた標高20mから30mの東にややせり出す丘陵地に所在している。本年度の調査対象地は、その内北向きの緩傾斜面にあたる部分である。

II、調査に至る経緯

宮崎医科大学に隣接する清武町大字木原から宮崎市大字熊野に至る標高20m前後の洪積世台地を予定地として、宮崎大学を中心とした宮崎学園都市建設事業が具体化するのに伴い、県教育庁文化課では同台地上における埋蔵文化財の分布状況調査を行ってきた。その結果、相当数の埋蔵文化財包蔵地が確認され、遺跡地として立地上も良好な台地であったことが明らかになった。埋蔵文化財包蔵地は、地域振興整備公団事業区域、宮崎大学建設予定区域ともに確認されており、宮崎学園都市建設局、地域振興整備公団と協議の結果、昭和55年度事業として、水路建設部分にあたる5号地と、幹線道路建設予定地の11号地について、地域振興整備公団の委託、県河川砂防課の依頼を受けて発掘調査を行った。

Ⅲ、調査の組織

調査の組織は下記のとおりである。

調査の主体	宮崎県教育委員会	
調査指導	宮崎学園都市遺跡発掘調査委員会	
(委員長)	石川恒太郎	県文化財保護審議会委員
(委員)	遠藤 尚	宮崎大学教授、県文化財保護審議会委員
	岡崎 敬	九州大学教授
	田中 熊雄	宮崎大学名誉教授
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部長
	寺原 俊文	県文化財保護審議会委員
	口高 止晴	〃
	森 貞次郎	九州産業大学教授
	柳 宏吉	県文化財保護審議会委員
	横山 浩一	九州大学教授

事務局

宮崎県教育委員会	教 育 長	四本 茂
	教 育 次 長	甲斐 俊則
	〃	坂口 鉄夫
	文 化 課 長	山本 磨
	課 長 補 佐	村田 広則
	庶 務 係 長	田中 君彦
	主 任 主 事	穂ノ上 昇
	文 化 財 係 長	山下 正明
	主 任 主 事	岩永 哲夫 (調査員)
	主 事	北郷 泰道 (〃)

調査協力	宮崎市教育委員会
	清武町教育委員会

IV、調査の概要

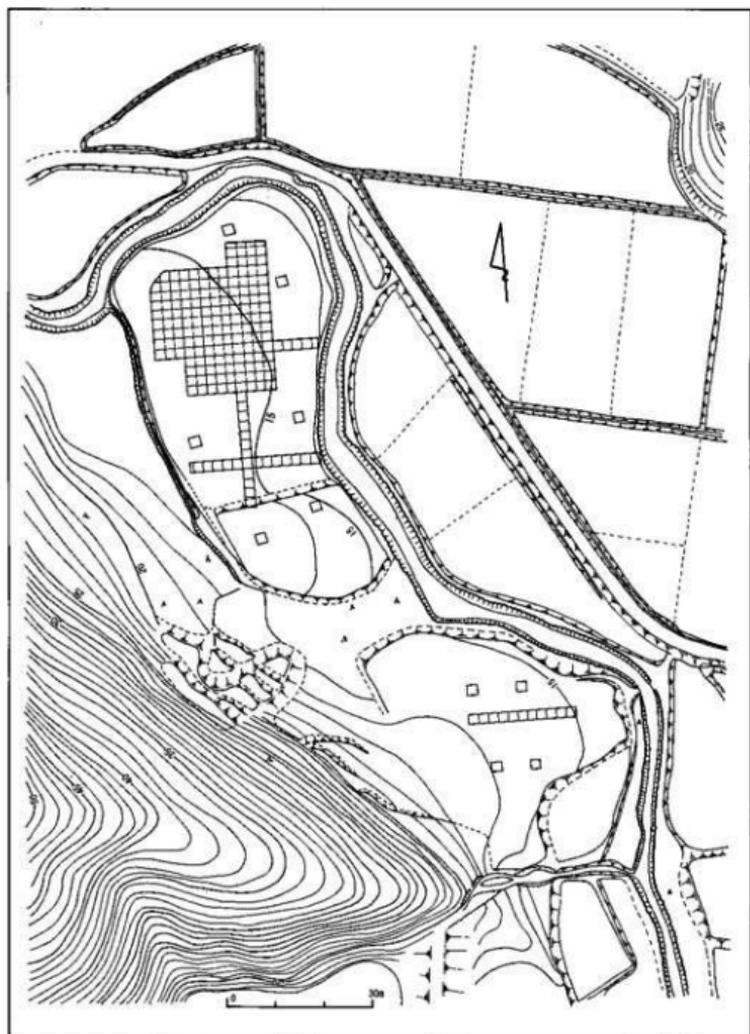
1. 5号地遺跡（清武町大字木原）

1) 調査経過

5号地遺跡についての発掘調査は、水路建設予定地を対象として実施した。調査前は畑地として利用されていたが、表採では須恵器片及び土師器片が確認された。表採の結果から古墳期以降の遺跡の可能性が強いとして着手したが、その時代の包含層はすでに削平され、縄文早期層の確認を進めることになった。

以下、発掘調査日誌よりその経過を記す。

- 10月27日（月） 晴 2×2mの試掘坑を6箇所設定する。試掘の結果、第1オレンジ層（アカホヤ）上の自然層が削平されていることが判明し、調査の対象は縄文早期層の検出を中心として進めることにした。磁北に合わせ、2×2mのグリッド設定。A1-12~14から縄文土器片出土。
- 10月28日（火） 晴 土器片の出土量が比較的多くなり、貝殻文、条痕文、沈線文等縄文早期土器の特徴がとらえられる。
- 10月29日（水） 晴 A1~A0-4~14についての表土剥ぎを行い、面的発掘に入る。
- 10月30日（木） 晴 A1-7~8において焼石の集石を確認。
- 11月4日（火） 晴 Ag~Ak-5~14の表土剥ぎのほか、南東部のミカン園に試掘坑を設定。土器片等の遺物の出土はみられなかった。
- 11月10日（月） 曇 Ag~Ak-6~14を掘り下げ。底部片2点他土器片出土。黒曜石片の出土がみられるが散漫な状態である。
- 11月12日（水） 晴 Ag~Af-11~12、A1~Am-17~18の2箇所に土城を検出。土城第1号（Ag~Af-11~12）から布痕土器、土師器碗、凹石等出土、土城第2号（A1~Am-17~18）から土師器片及び鉄鏃と思われる鉄製品2本が出土する。両土城とも焼土及び炭火物が認められ、土城第1号内の土師器碗は9~10世紀のものと思われる。
- 11月13日（木） 晴 土城第1・2号を10分の1で実測及び写真撮影。
- 11月18日（火） 晴 遺跡主要部についての全体的掘り下げ。押型文、石鏃等出土。

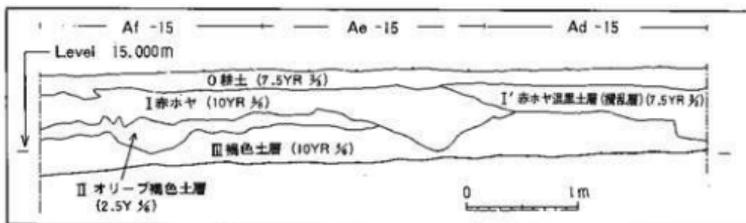


第2图 5号地遗址发掘区图

2) 包含層の状態

遺構・遺物の発見された地点は、北側畑地においてであり、小谷を狭む東に延びた舌状地のみかん園からはわずかに数点の弥生土器細片を出土したのみであった。Ad~Ao・4~19において表採した須恵器・土師器の包含層は削平によってほとんど消滅しており、0層とした耕土を取り除くと、第1層の第1オレンジ（赤ホヤ）層があらわれた。第1オレンジ層は20~30cmの厚さを有し、所によっては削平され欠失している部分も見受けられた。

Af-8から出土した縄文前期曾畑式土器は少量ながら第1層中から発見された。第Ⅱ・Ⅲ層の硬質褐色土層は、縄文早期土器、集石遺構を包含しており、5号地における遺跡主体部と考えられる。第1・第2の土域もこの層にまで掘り込まれたものであった。遺跡主体部の南方は谷部分であったとみられ1m以上の黒土が堆積（上部は埋土か?）していた。北方の2号集石周辺は一面に亘って自然攪乱の状態で礫がみられるなど、土層形成上複雑な様相が看取された。



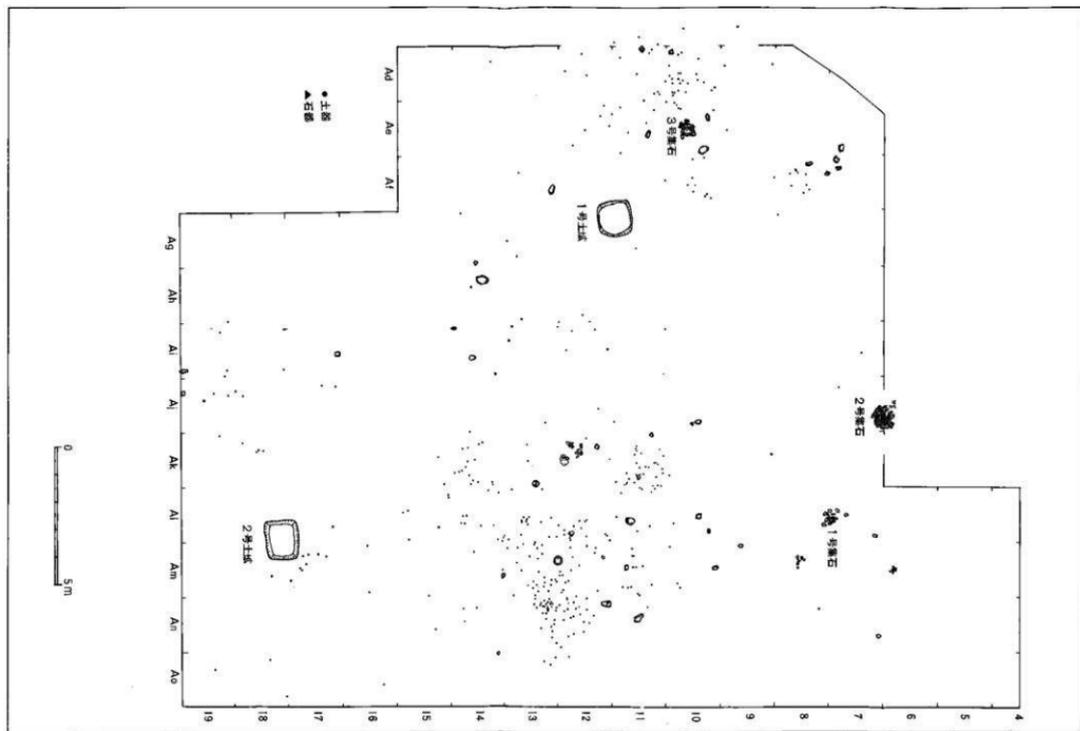
第3図 Af~Ad-15 南壁土層実測図

3) 遺 構

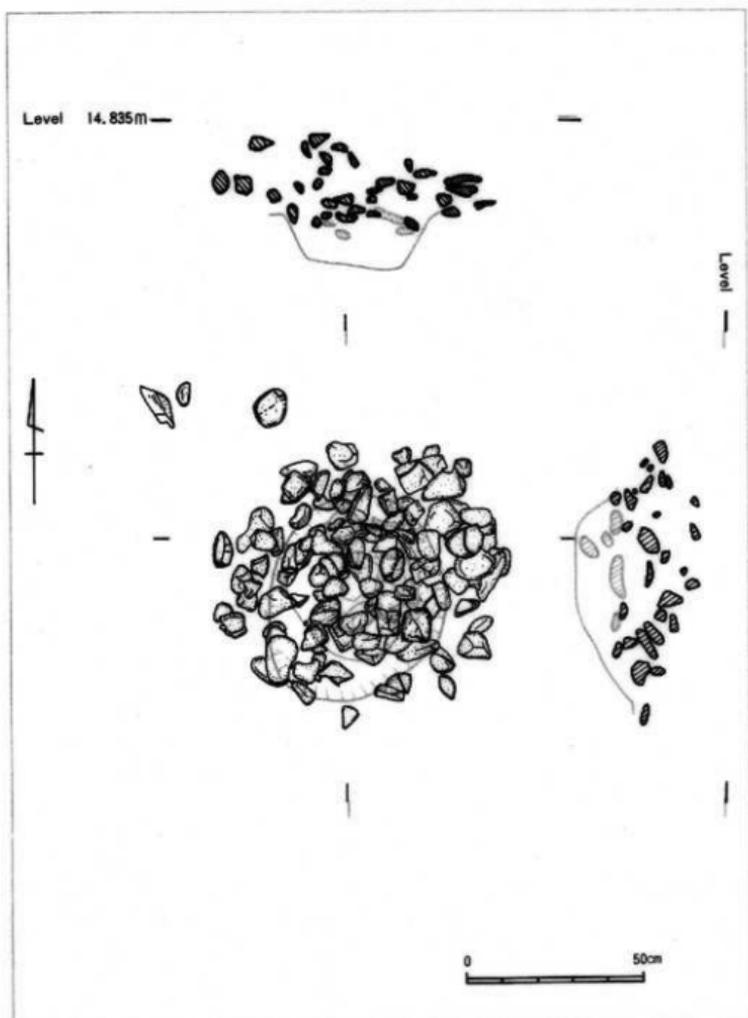
a、集石遺構

集石遺構は、3ヶ所において見られたが、いずれも火を受けたものと考えられ、その多くは脆く赤褐色を呈していた。

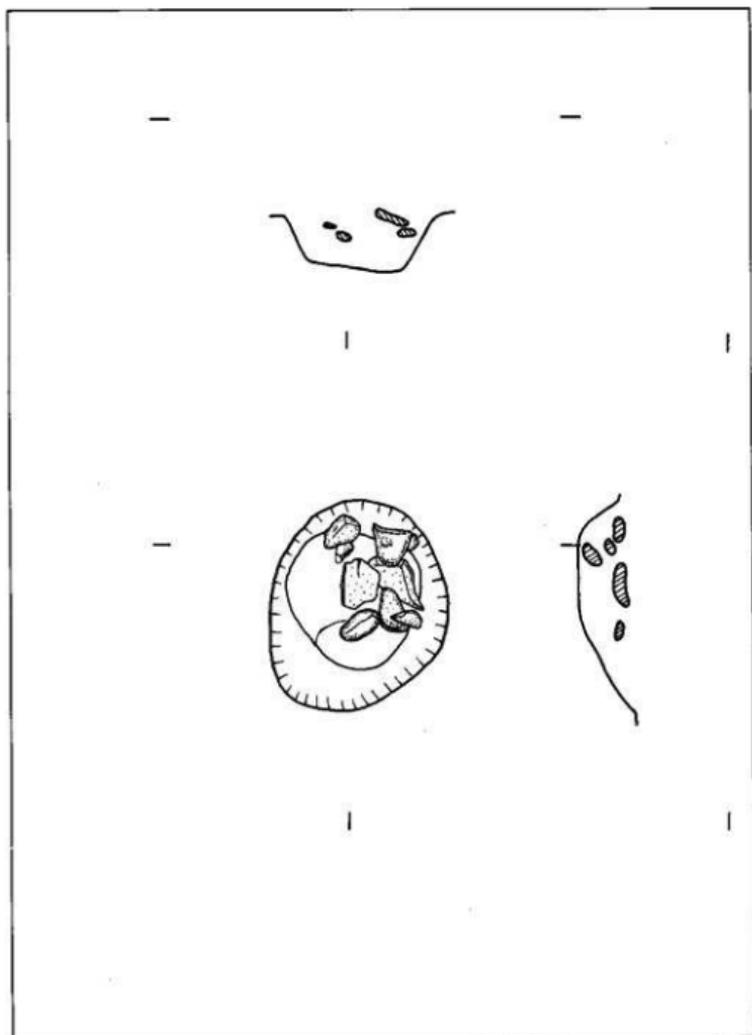
1号集石は、礫数は少なかったが、90×60cmの範囲をなしていた。炭化物は確認できなかった。2号集石は、1号の北西4mの地点、Aj-6~7に位置しており、小礫を多量に集め、90×90cm範囲に集積し、隙間には細かな炭火物がみられた。床面は掘り窪み、第5図に見る如く、2号ではやや大きめの礫を数個敷き置いた状態であった。3号は、Ae-10に位置し、数個が火を受けた状態で、1号と同じく少量の礫を集積していた。炭化物は見られなかった。構築面の状態から縄文早期土器に伴うものと考えられる。



第4图 遺構及び遺物分布状況実測図



第5圖 2号集石実測図



第5图 2号集石实测图

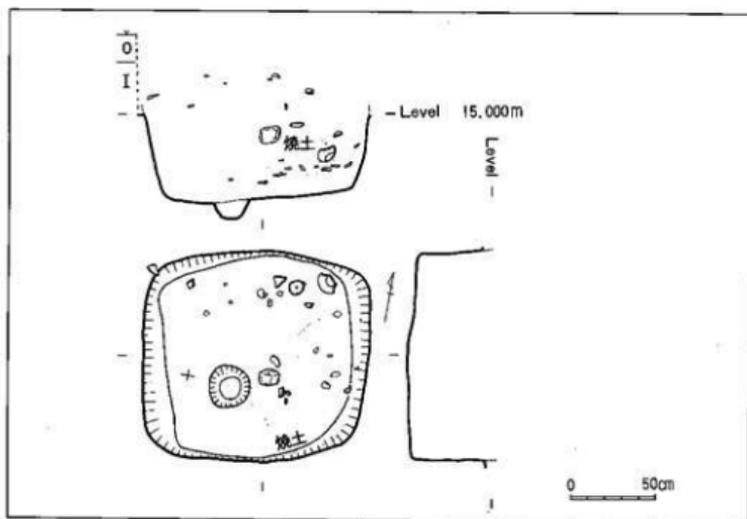
b、土 城

土城は2ヶ所において見られ、Af~Ag-11~12区所在を1号、Al~Am-17~18区所在を2号と呼ぶ。

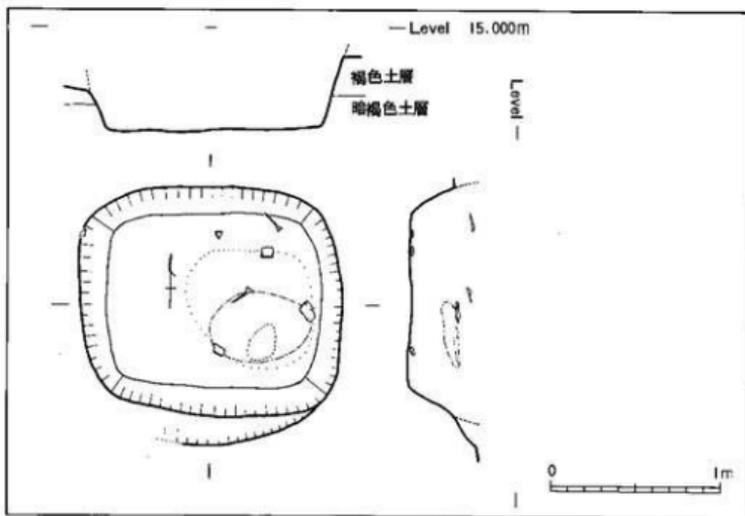
1号は、床面で110×120cmの不整形な楕円に近い方形をなし、遺物は少数であるが、土師器碗、布痕土器、凹み石、角礫等を出土した。また、焼土が東半において上位から下位にかけて見られ、土器片も東半に集中していた。中央からやや片寄った位置の床面には、径25×25cm、深さ約10cmの円形掘り込みが確認された。表土から床面までの深さは約100cmを測る。

2号は、床面で105×125cmの隅丸方形をなしていたが、南側の掘り込み状態は不明瞭なものであった。遺物の出土は東半に限られ、布痕土器、鉄鏃等が発見された。2号内部にも焼土が見られ、上位に15×20cmの範囲で焼土、焼土直下に40×60cmの範囲で細かい炭化物、床面に密着して70×75cmの範囲で炭化物面が確認された。遺構の掘り込みは、褐色土層下、暗褐色土層に達している。

これらの土城は、出土土師器から、9~10世紀に掘り込まれたものと考えられる。



第6図 1号土城実測図



第7図 2号土坑実測図

4) 遺物(第8図～第11図)

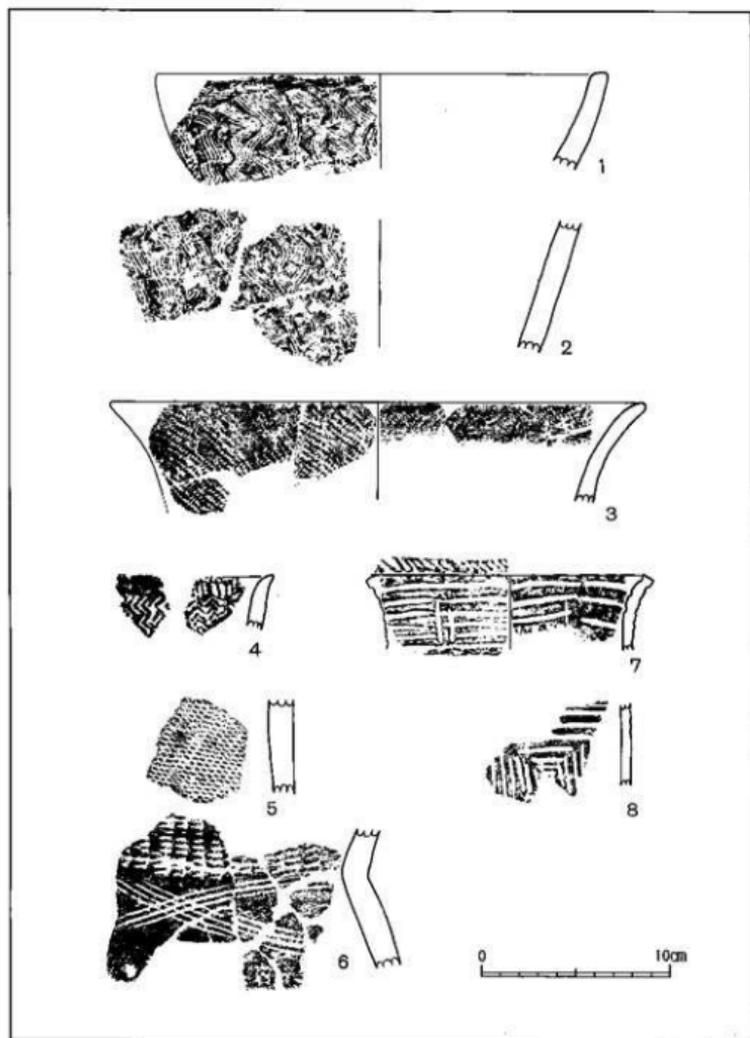
出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、鉄器、石器類である。

縄文土器は赤ホヤ及び赤ホヤ下褐色土層中から出土し、すべて破片であるが、早・前期に比定できるものである。貝殻文(押しき、条痕、刺突)、押型文(山形・楕円)、縄文、沈線文等の文様を施す深鉢形土器と考えられる。

1は、推定口径23.8cmを測る内湾気味のやや厚手の口縁部である。口唇は平らで、やや内傾している。外面には4～5条を単位にした貝殻腹縁によるとみられる波状文を施している。しかし波状には統一性がない。焼成は脆く、胎土に多くの石英粒を含む土器である。褐色を呈する。2は、1の口縁部と同一個体ではないかと考えられる胴部片である。文様構成、胎土、焼成等、1と同様である。

3は、推定口径28.2cmを測る外反する口縁部である。口唇部は平らで、外傾気味である。外面には全面に亘って縄文を施し、内面には1.0～1.5cm幅に施文している。焼成は脆く、褐色を呈した薄手のものである。

4は、わずかに外反する山形押型文施文土器の口縁部である。外面は縦走、内面には上部



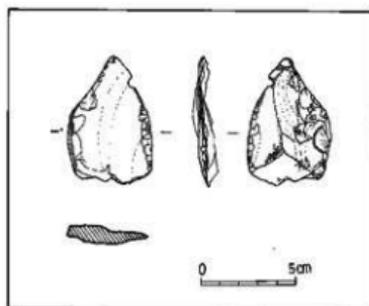
第8图 绳文土器实例图拓影(缩尺 $\frac{1}{2}$)

に条痕、その下に山形押型文を横走させているが、粗雑な施文である。焼成良好で、褐色を呈している。5は、楕円押型文（穀粒文）を施した厚手の胴部片である。砂粒を多く含み、焼成良好な暗褐色土器である。

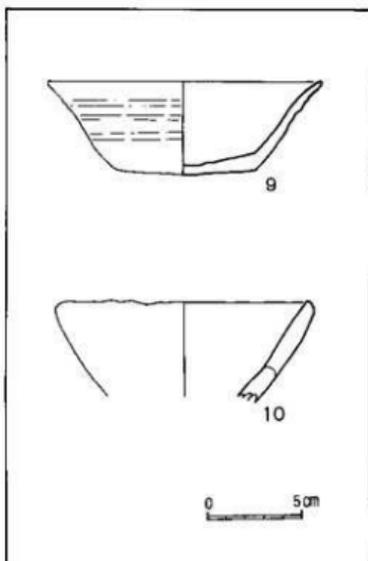
6は、頸部「く」字形屈折の貝殻文土器で、塞ノ神B式にあたる。5号地遺跡においては、最も多量に出土した土器である。屈折部の上位には貝殻腹縁による横方向の押しき文を施し、下位には3～4条を単位とした貝殻条痕文を斜方向に交叉させている。焼成良好な褐色土器で厚手である。

7・8は、沈線により図柄構成しているいわゆる管烟式土器である。7はAg-7周辺から出土した推定口径14.2cmのやや外反する深鉢形土器である。文様はやや太目の沈線を口唇部、外面全体、口縁部内面に横位を主体として施文されたものである。焼成良好、褐色を呈する。8は7と同一個体とみられる胴部破片で、上部は横走させた沈線であるが、下部は市松文的に方形施文を行っている。

2基の土域内からは土師器が出土している。9は1号土域から出土した碗形土器である。



第10図 出土土器実測図(縮尺1/2)



第9図 土域出土土師器実測図(縮尺1/2)

口径14.5cm、器高5.0cmを測る。底部はヘラ削り、体部外面は凸凹を残し、調整している。口縁部はきれいにナデ仕上げを施している。10は厚手の口縁部で、推定口径13.0cmを測る。内面に平織りの布痕が残っている。

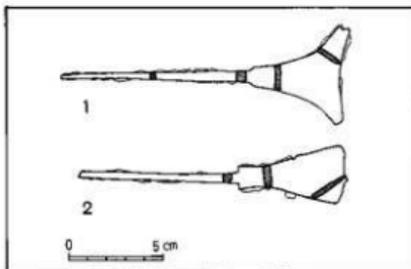
また、2号土域内から雁股式（第11図1）と方頭斧箭式（第11図2）の鉄器が出土している。

石器類としては、石鏃、磨石、窪み石、搔器等があげられる。

5) 小 結

5号地遺跡は、東方に張り出した低位の舌状台地で、水路建設予定地のため、55年度の調査対象地になったものである。

包含層として確認できたのは、赤ホヤ層下の褐色土層であった。褐色土層中からは、貝殻文土器(塞ノ神B式)、縄文施文土器、押型文土器、波状条痕



第11図 2号土坑出土鉄鏝実測図(縮尺1/5)

文土器、沈線文土器、石鏝、磨石等が出土している。これらの中で、最も多量に出土したのは貝殻文土器で、面的広がりもほぼ全区域に亘って出土した。また赤ホヤ層中から沈線文土器(曾畑式)が少量ながら出土し、褐色土層出土土器との时期的関連が注目され、南九州早・前期編年上、鍵層になり得る赤ホヤ層とともに今後の編年における検討資料を得たことになる。赤ホヤ層を境として、下位褐色土層出土土器は早期に、赤ホヤ層出土土器は前期に比定できそうである。

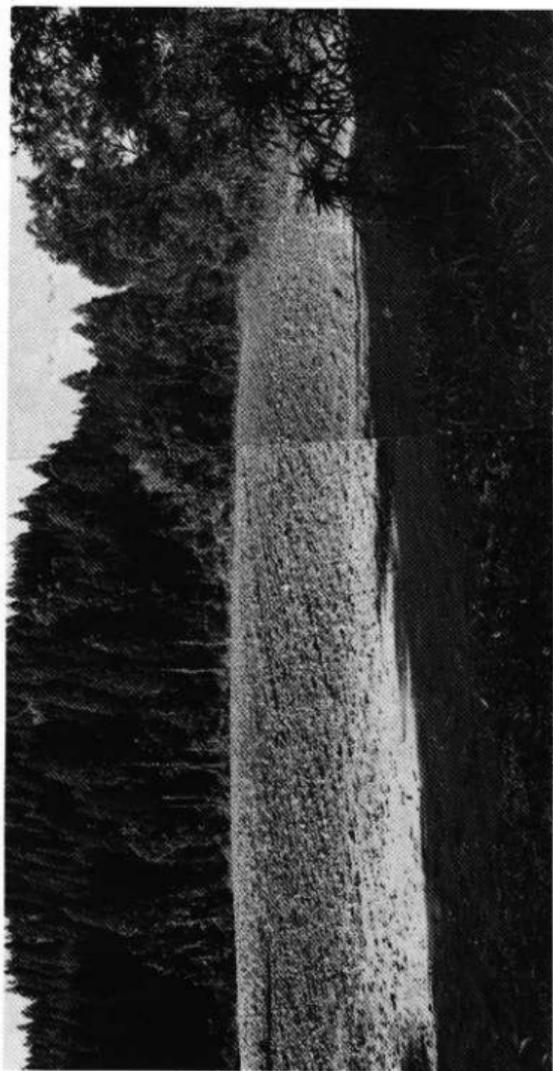
集石遺構の1・3号は、焼窯は認められるものの、窯下の掘り込みが見られず、機能を考察できる積極的な資料は見出すことができなかった。2号については、石蒸し(Earth oven)的機能が考えられるが、縄文早・前期に特徴的にみられる集石遺構について、奥内における発見例[※]とともに再検討する必要がある。

次に、2基の土坑は、形態的内容的に共通している部分が多く、同時期に構築したものと考えられる。出土土器から9～10世紀に比定できよう。土坑に関連する他の遺構は検出できなかったが、耕土上に散布していた須恵器、土師器とともに、平安時代に営まれた遺跡の存在を裏付ける資料といえそうである。

5号地遺跡は、生活面として利用可能な面積は限定されたものであり、縄文から平安までの長い時代幅を持って生活痕跡が認められたとはいえ、出土遺構・遺物の希薄さから考えても、短期的に営まれた遺跡といえることができる。

- ※ 1. 野尻町梯遺跡 押型文土器を共伴 昭和54年2月発掘調査(未報告)
2. 新富町大字新田字中尾において、昭和52年9月22日南出した舌状台地先端部(畑)を整地作業中発見、押型文を共伴
3. 清武町止遺跡 「辻遺跡」 昭和55年4月 清武町教委・清武町土地開発公社

图版 1



5号地遺跡(築壘前)



(1) 発掘風景



(2) 遺物出土状態

図版 3



(1) 2号集石

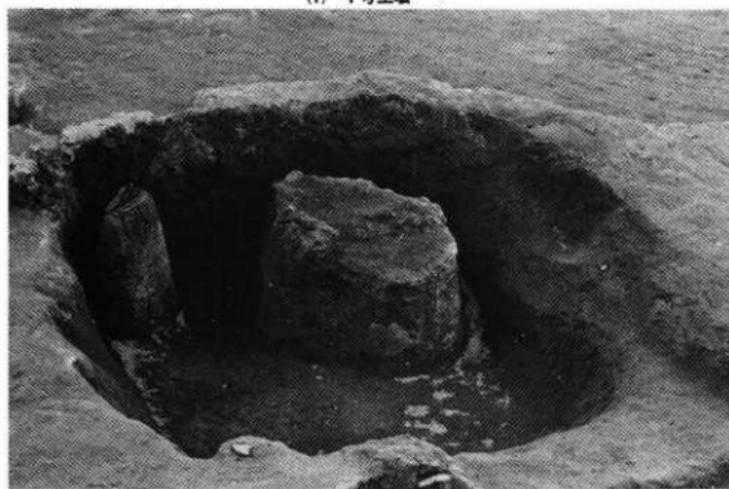


(2) 2号集石下部

图版 4

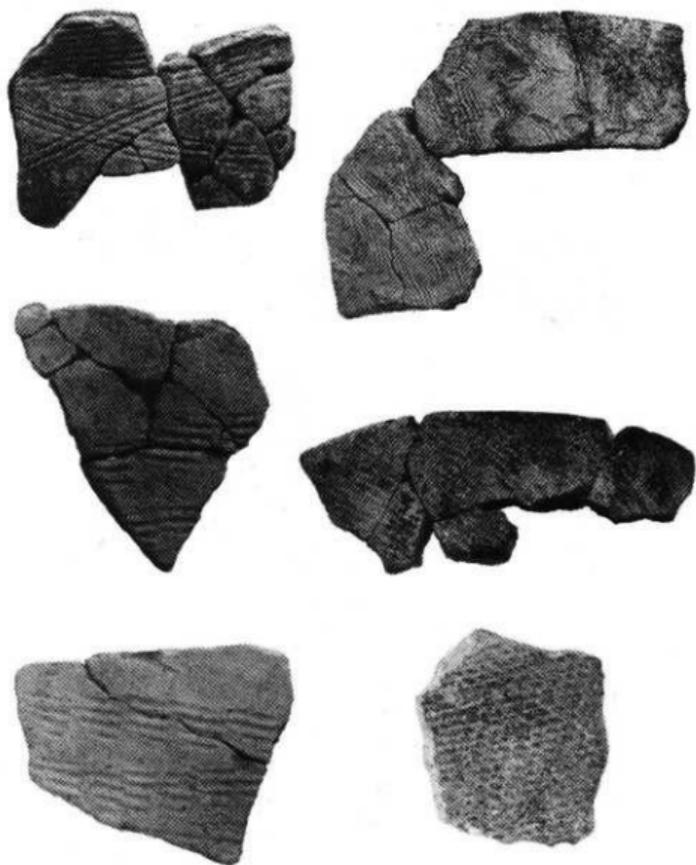


(1) 1号土坑



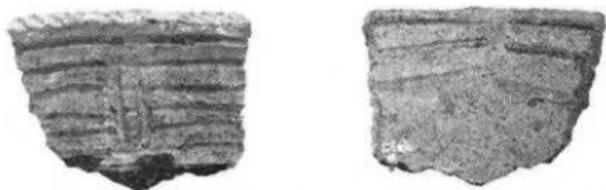
(2) 2号土坑

図版 5



出土遺物 (1) 縄文土器

図版 6



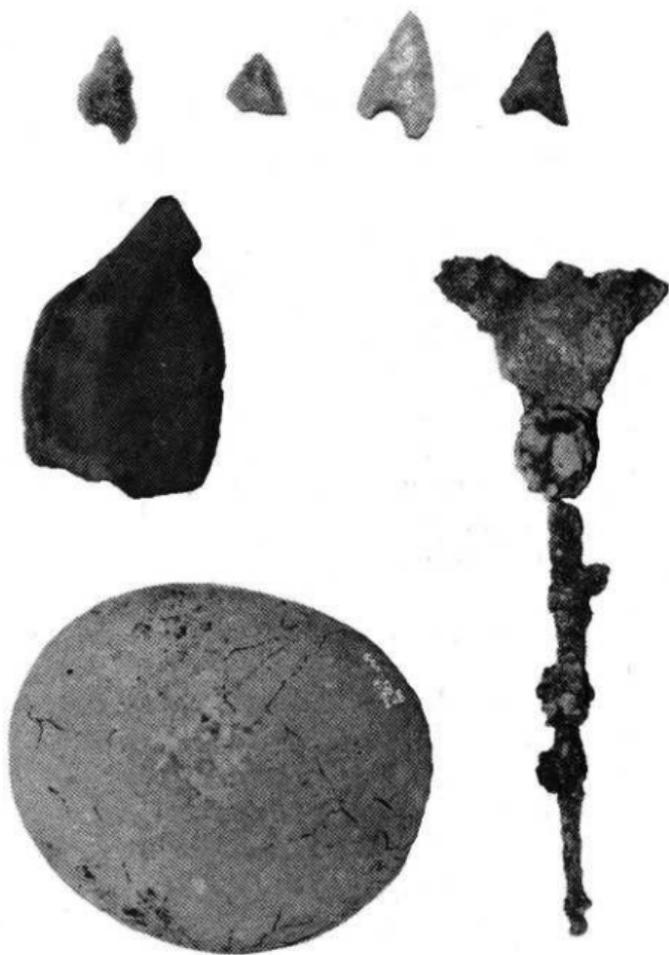
縄文土器

布痕土器



出土遺物 (2) 縄文土器・布痕土器

図版 7



出土遺物 (3)

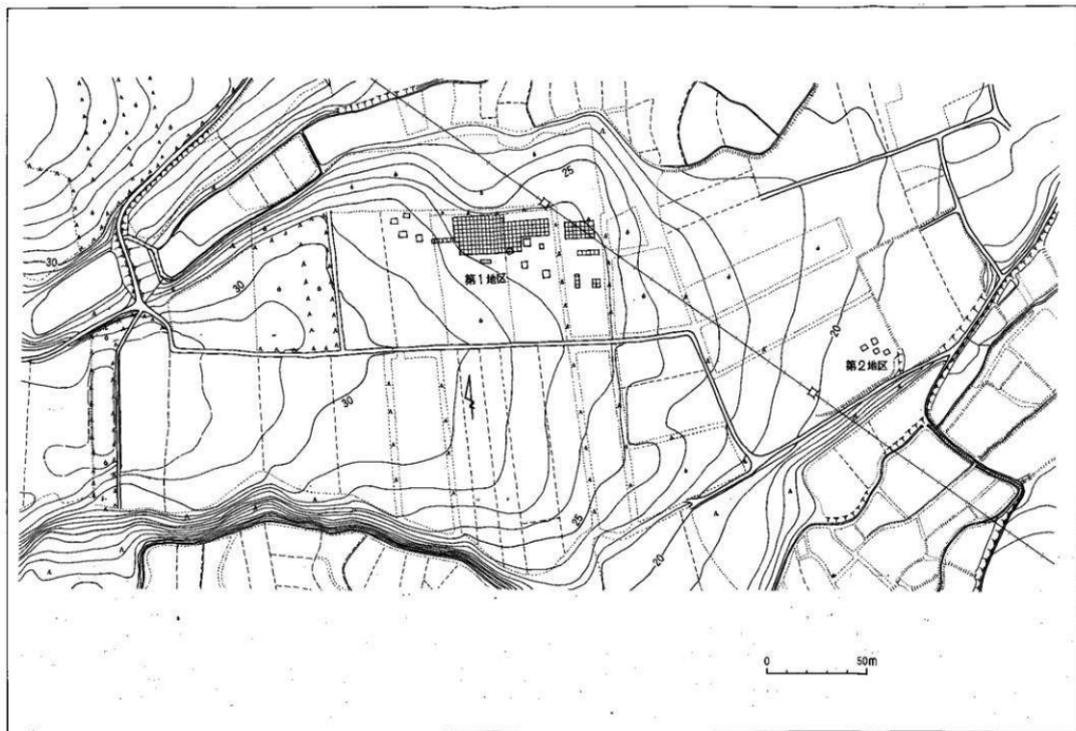
2. 11号地遺跡(宮崎市大字熊野)

1) 調査経過

55年度の11号地遺跡についての発掘調査は、幹線道路建設予定地を対象として着手した。調査前の表探では、弥生土器及び土師器の破片が確認されていたが、調査対象地に13箇所試掘坑を設定し発掘したところ、アカホヤ層までがほぼ削平されていることが判明した。しかし、一部包含層と思われる黒色土層がアカホヤ層上に残っている箇所が確認されたため、調査の主眼は黒色土層の広がりの確認を主として進めることにした。

以下、発掘調査日誌よりその摘要を記す。

- 11月18日(火) 晴 11号地の発掘調査開始。試掘坑を設定し発掘。
- 11月19日(水) 晴 磁北に合わせ、2m×2mのグリッドを第1地区に設定。By~Ci-11を発掘。
- 11月26日(水) 晴 Bf~Bx-11及びBy~Ci-8~10を発掘。アカホヤ層上面で黒色土の落ち込みを3箇所確認する。
- 12月3日(水) 晴 Bp~Bs-9~12においても、黒色土の落ち込みを確認した。出土遺物としては弥生土器片が主で、当該期の遺構の可能性が濃厚となった。
- 12月4日(木) 晴 Bn~Bu-9~10を発掘。遺構の検出に努める。その結果Bg~Br-11で認められた黒土色の落ち込みは、V字溝と判断出来るものとなった。
- 12月9日(火) 晴一時雨 B1~Bu-6~10の精査掘り下げ。須玖系の弥生土器出土。
- 12月12日(金) 雨のち晴 本日までで、溝状遺構、土城、ピット群等の、いずれも弥生時代のものと思われる遺構群を検出。
- 12月17日(水) 晴 By~Ca-11~14で住居跡1箇所検出。約5×5mの方形プランと思われる。
- 12月18日(木) 晴一時雨 1号住居跡から軽石製石棒出土。県内では、まだ類例のない資料である。
- 12月22日(月) 晴 遺り方測量により、主要部について20分の1実測。



第12图 11号地震避难区域图

3) 遺構 (第13図)

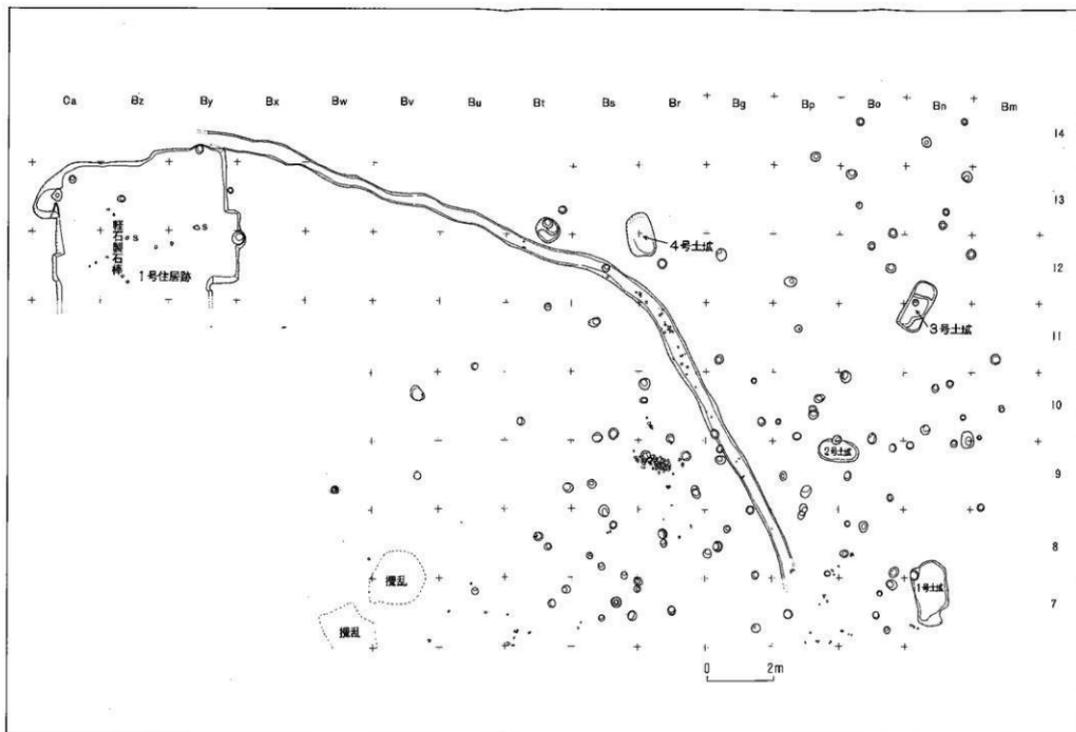
検出された遺構は、住居跡1、土坑4、ピット群、溝状遺構などである。

住居跡は一辺4 m 80 cm程の方形プランをなすものと思われ、現存での床面までの深さ約40 cmである。柱穴の検出に努めたが、住居跡内には、壁面添いに4箇が確認されたほか、支柱の柱穴と考えられるものの存在は認められなかった。

住居跡内からの遺物の出土は少数に限られたが、刻目突帯文をもつ壘形土器片が出土しており、弥生中期の住居跡と考えられる。特に注目される遺物としては、軽石製石棒がある。

土坑は4箇発見されたが、わずかに4号土坑から石錘の出土がみられたのみで、他に遺物は認められていない。1号土坑は、約1 m × 1 m 90 cmの不成形な長方形を示し、2号土坑は、60 cm × 1 m 20 cmの長楕円形状を示す。また、3号土坑は、約70 cm × 1 m 50 cmの長方形を示し、4号土坑は、約80 cm × 1 m 20 cmの不成形な長楕円形状を示す。

溝状遺構は、東から一旦西に向かい、湾曲して北へ向かっている。ちょうど溝状遺構の湾曲のはじまる地点が北傾斜の谷地形にさしかかる部分にあたり、そこから北傾斜の谷間を流れる形となっている。遺構そのものとしては、底面までわずか20 cm程を残すのみで遺存状態はかんばしくなかった。溝状遺構内からも弥生土器片が出土しているが、いずれも細片である。現存溝幅約40 cmである。



第14図 遺構及び遺物分布状況実測図

4) 遺物(第15図～第19図)

遺物としては、縄文土器、弥生土器、石器類がある。

縄文土器は、耕土ないしは攪乱層の出土で、プライマリーな層の把握は出来なかった。種類としては、縄文早期の楕円型土器片1点、縄文後期のほぼ全体形をうかがう程には復元可能な深鉢形土器1点、ほか縄文後期に属する貝殻文系土器片約200点等がある。

第15図1は、口縁部が肥厚化し、その肥厚化した部分とその下位に2段のヘラ描きによる斜行列線文を施すものである。胎土には石英砂を多く含み、色調は暗赤褐色を呈し、焼成は良好である。文様帯は口縁部約6cm程までに限られ、以下は条痕文である。推定口径32.5cm、現存器高29.3cmを測る。また口縁部の最も肥厚化した部分での厚さは1.3cmである。しかし、胴部の器壁は、比較的薄手に仕上げられている。

第15図2は、条痕文を地文とし、貝殻腹縁文を施文するものである。口縁部に肥厚化はみられない。ほか、縄文土器片の多くはこの種に属するものである。

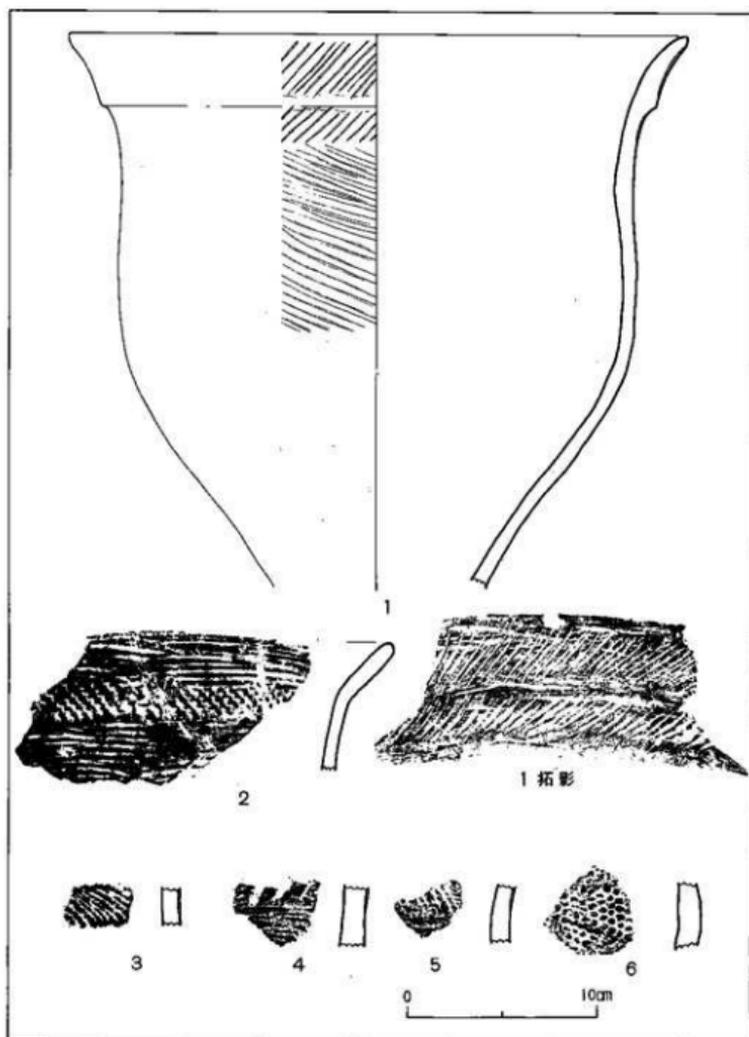
縄文土器で特記すべきものは、図版14-1に掲げた口縁部であろう。口縁部にみられる2つの突起は、蛇身を形どったものと思われ、刺突文による目の表現がなされている。比較的大きな石砂粒を胎土に含み、色調は暗褐色を呈し、焼成はやや悪い。

弥生土器は、耕土下の黒色土層に包含されていたが、Br-9に集中的な出土がみられたほかBn-Bu-7-8にかけて散漫な分布が認められたに過ぎない。種類としては、弥生中期を中心とする突帯文土器が主で、ほぼ全体形をうかがう程に復元出来たものは3点程である。

第18図1は、口縁部が「く」の字に外反する刻目突帯文の甕形土器である。口唇部にはやや凹みがみられ、ヨコナデ調整である。口縁部と突帯の下に多くの煤の付着がみられる。突帯の上下端の器面にはやや凹みがみられ、突帯の張り付け面は良く整形されている。胎土には石砂粒を多く含み、色調は白黄色を呈し、焼成は良好である。推定口径27.6cm、現存器高13.6cmを測る。

第18図2は、口縁部がややゆるやかに「く」の字に外反する突帯文の甕形土器である。口縁部から突帯文にかけてはヨコナデ調整、突帯下はタテのハケ目調整、内面はナメのハケ目調整である。胴部には、煤が付着している。胎土には細かい石砂粒を多く含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。推定は径34.8cm、現存器高20.5cmを測る。第17図5は、この土器の底部片と思われる。

第18図3・4は、刻目突帯文をもつ口縁部片である。1号住居跡出土の土器片も、このタイプの土器が主体を占めている。

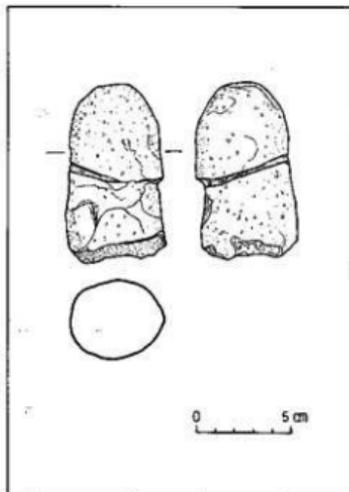


第15图 绳文土器实测图·拓影(縮尺1/5)

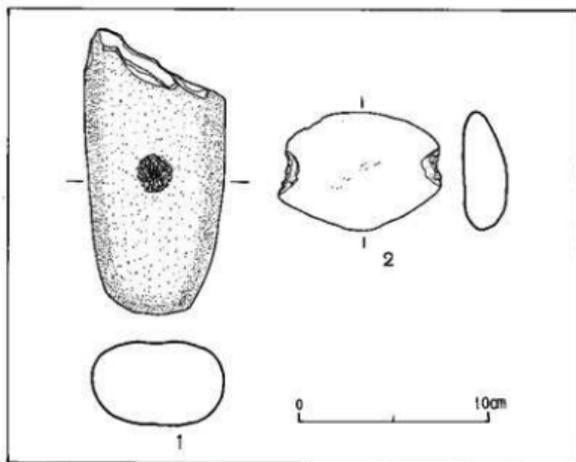
第19図は、実測図復元で頸部から底部までの器高約57cmとなる大型の壺形土器である。頸部に6条、胴部に4条の断面三角形突帯をはりめぐらしている。底部は平底である。胎土は精緻なもので、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。推定胴部最大径42.1cmを測る。

石器類としては、石錘、凹石等が出土している。第17図1は、叩石と凹石の両方を兼ねるものである。

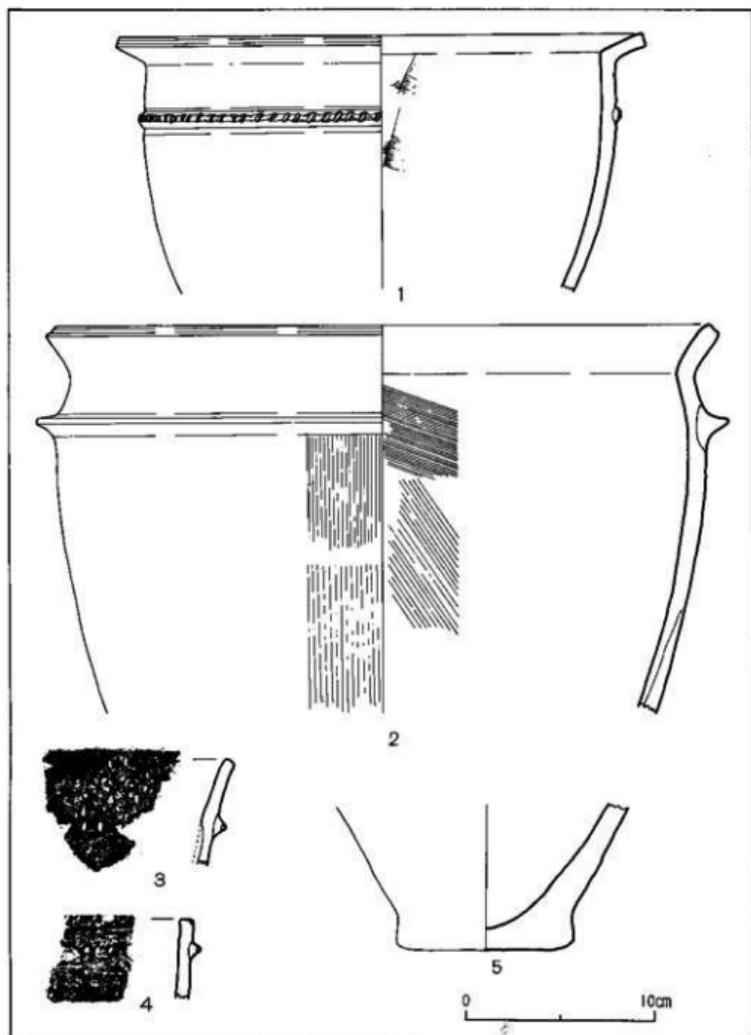
1号住居跡出土遺物の内、特記すべきものとして軽石製石棒(第16図)がある。長さ9.9cm、断面はやや卵形を呈し、長径4.9cm、短径4.2cmを測る。龜頭部も明確に彫り込まれ、かなりリアルに男性性器が表現されている。



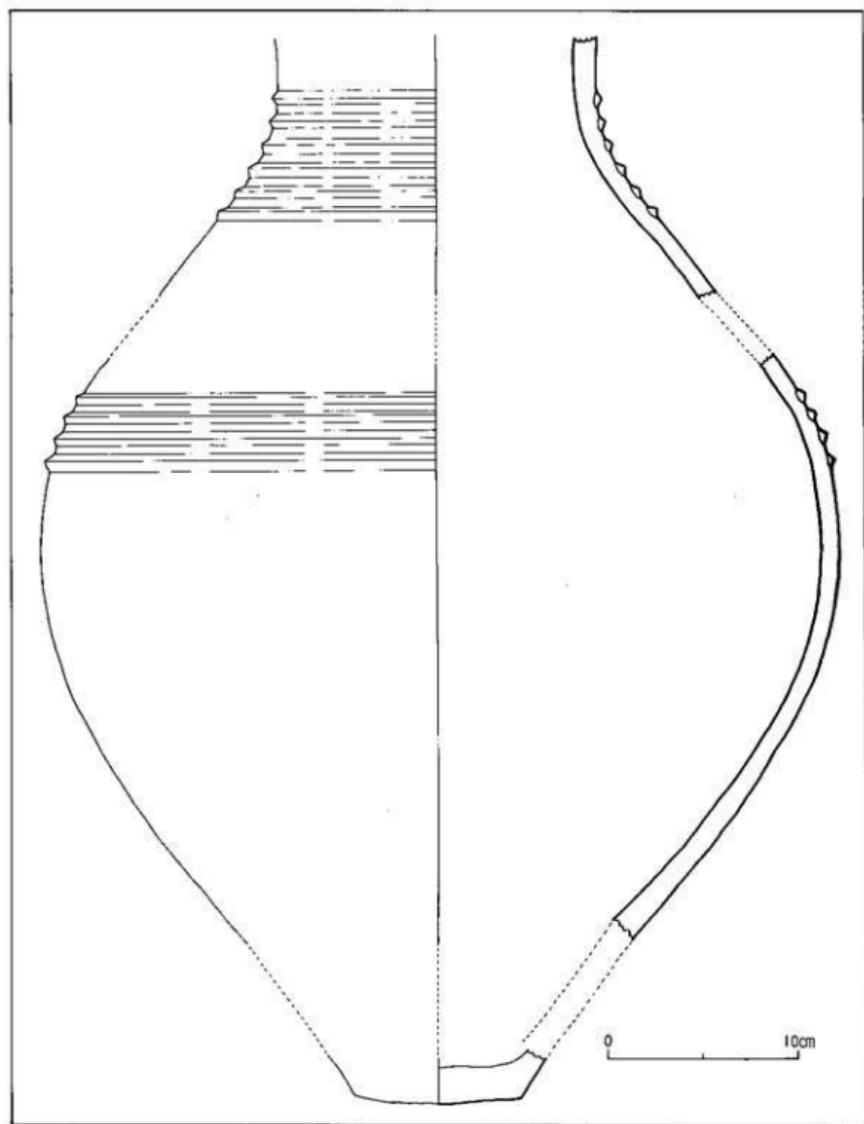
第16図 1号住居跡出土軽石製石棒実測図(縮尺1/2)



第17図 石器実測図(縮尺1/2)



第18图 弥生土器实测图(轴尺1/5)



第19图 Br-9 出土壶形土器实测图(轴尺 $\frac{1}{2}$)

5) 小 結

55年度の11号地の発掘調査は、幹線道路建設予定地の限られた部分の試掘調査で、その対象区も北向きの緩傾斜地という遺跡立地の上では余り期待の持てる場所ではなかった。しかし、弥生土器の包含層を確認することが出来、住居跡、溝状遺構等の弥生時代の遺構を検出し得たことは、11号地が有望な遺跡地として確認されたことを意味していよう。

住居跡は、刻目突帯文をもつ弥生土器の出土から弥生中期後半に位置付けられる。住居跡内からの遺物の出土は少量で、土器類は細片が10点程出土したに過ぎないが、注目されるのは軽石製石棒の出土で、県内初の出土例となった。鹿児島県下⁽¹⁾では、入来遺跡、山ノ口遺跡、境遺跡の3遺跡からの軽石製石棒の出土が知られているが、それらとは形状に大きな差異が認められる。

Br-9に集中した出土をみた弥生土器は、復元の結果1個体の壺形土器と2個体の甕形土器であることが確認された。壺形土器は、頸部と胴部に突帯文をはりめぐらす施文法及び器形上の特徴から弥生中期に比定されるもので、その大きさから壺棺の可能性も考えられる。甕形土器も弥生中期の特徴をもつものであるが、いずれにしても出土状態が周辺の遺物及び遺構との関連を欠き、出土状態の理解には問題を残している。

溝状遺構、ピット群など面的に広がる遺構については、周辺部の発掘調査の結果も合わせて総合的な検討を行いたいと思うが、谷間と北向き傾斜の地形を利用した溝状遺構の構築法など、その性格を示唆するものがあり興味深い。

縄文土器については、耕土ないしは攪乱層からの出土であったが、器形の全体をうかがうに足る深鉢形土器が出土し、周辺部での確実な包含層の検出が期待される。また、蛇身を表現したと思われる縄文土器口縁部の出土は、軽石製石棒の出土と共に注目され、県内初の出土例となった。その性格及び位置付けについての詳論は、全国出土の類例、ことに西日本出土の類例と比較検討し、本報告上で行う予定である。

註

(1) 池 畑 耕 一 「鹿児島県における生熟器信仰の系譜——考古学の資料を中心に——」

『大龍遺跡』大龍遺跡発掘調査団（1979年）

図版 8

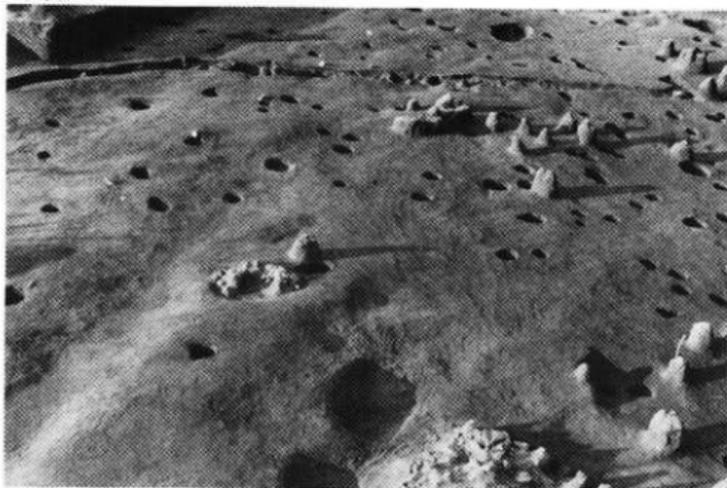


(1) 11号地近景



(2) 11号地近景

図版 9



(1) 溝状遺構及び土壇・ピット群(東側から)

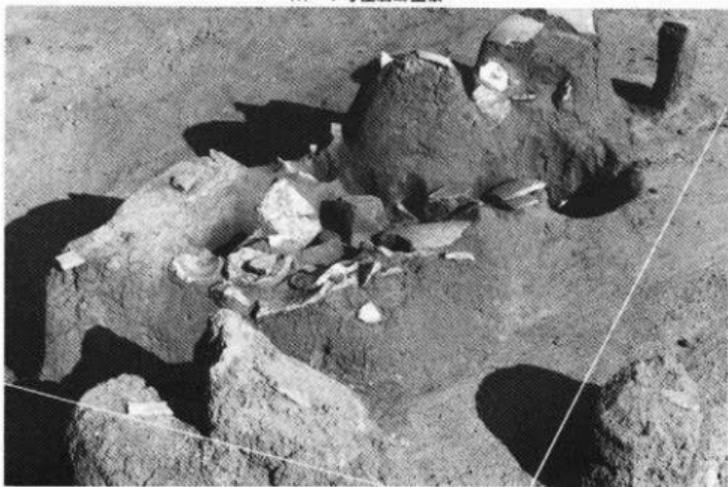


(2) 溝状遺構及び土壇・ピット群(西側から)

図版10



(1) 1号住居跡全景



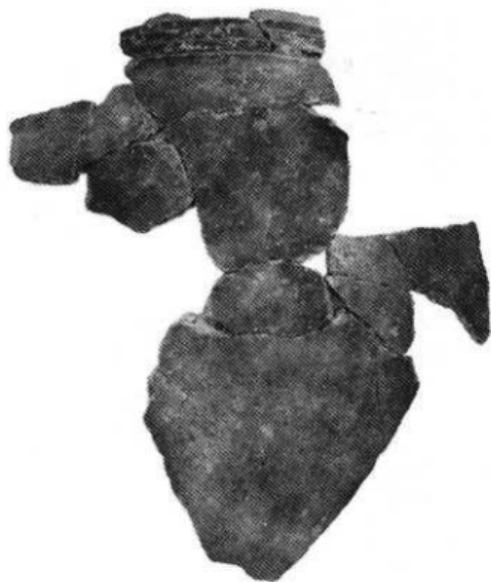
(2) Br-9 弥生土器出土状態

图版11



出土遺物 (1) 弥生土器

图版12



出土遺物 (2) Br-9 出土壺形土器

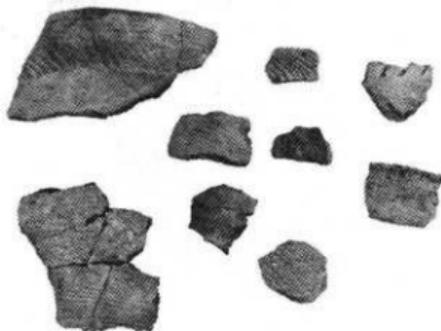
図版13



(1) 弥生土器



(2) 縄文土器
(1)



(3) 縄文土器
(2)

出土遺物 (3) 弥生土器・縄文土器

図版14



1



2



3



軽石製石棒

4

出土遺物 (4) 軽石製石棒ほか

V、結 語

55年度の発掘調査は、水路建設予定地にかかる5号地遺跡と道路建設予定地にかかる11号地遺跡の2遺跡についてであった。

5号地遺跡については、調査地が地形的に限られた狭少な場所であったため、完掘することが出来た。分布調査の段階では土師器及び須恵器の散布が確認されていたが、発掘調査の結果はアカホヤ層上が耕作開地により削平され、包含層の追求は縄文早・前期に限られたものとなった。しかし、発掘調査の進展にともない9～10世紀の土坑が検出され、層位的にはあきまっていた時代の遺構が発見されたことは、発掘調査を進める上で一層の慎重さが要求されることをあらためて認識させるものであった。縄文早期に伴う集石遺構の位置付け及び土器分布の状態の理解などは、本報告で詳細に検討を行いたいと思う。

次に、11号地遺跡については部分的試掘調査であり、全体的な遺跡地の検討は周辺地の発掘調査の結果と合わせて行うしかないが、軽石製石棒、蛇身を形どったと思われる縄文土器口縁部など興味ある資料が出土しており、かなり有望な遺跡地として評価出来ようと思う。11号地遺跡も5号地遺跡と同じく、試掘坑を13箇所設定したところ、アカホヤ層上が耕作開地により削平されていることが判明し、調査前の期待は幾分裏切られたものとなった。アカホヤ層下の縄文早期層の追求も試みたが、5号地遺跡とは土層の状態が異なり、アカホヤ層下は硬質黒色土層となり遺物の出土は認められなかった。結果としては、B1～Bx-6～14に北向きの谷間が存在することが確認され、アカホヤ層上の包含層の追求も可能となり、溝状遺構、土坑、ピット群の存在が確認されることになった。今後の調査の対象は、丘陵上及び南緩傾斜地に及ぶことになり、11号地遺跡の全容も明らかとなろう。

313

宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報(I)

発行年月日 昭和56年3月31日

編 集 宮崎県教育庁文化課

発 行 宮崎県教育委員会